

《書評》

Jörg Rüpke, *Pantheon:
A New History of Roman Religion*

Princeton: Princeton University Press, 2018, pp. xv+551

小雲立也

近年、宗教、特に現代宗教の社会学的研究において“Lived Religion”という考えに注目が集まっている。1960～70年代の“経験”への関心の高まりを背景に、21世紀には信仰を持つ一方で制度や組織に縛られない人々が出現し、既存の宗教研究の枠組みを現代の宗教に合わせて見直す必要が出てきた。こうした状況から、個人の多種多様な宗教実践・経験・表現に着目する Lived Religion 研究が生まれた。この語の提唱者であるデイヴィット・ホールによると、Lived Religion は「遂行・実行されると言う意味で『生きられた』実践を重視する宗教研究の手法」を意味する¹⁾。

こうした Lived Religion 研究の手法を、古代ローマ宗教の分野に持ち込んだのが本書である。地中海世界の宗教は伝統的に公的宗教というレンズを通して考えられており、特に政治や法律の観点からの研究が進められてきた。地中海宗教は現代の学者たちによって、その地に根ざした政治共同体の宗教と見做され、そしてここで祭り上げられる神々はその性質を分析され、神々の総体 pantheon として構築される。この点において、宗教はある種システムチックな存在である。著者の Jörg Rüpke が研究対象とする個人は、確立され、普遍化した思考・行動様式をただ習得し、再生産するだけの存在ではない。彼らは個人的な目的のために他の様式を吟味し、選択し、導入する。個人の行為は戦略的であり、時には反体制的な側面を持つ。著者は社会学的な手法によってローマ世界の宗教を描き出そうと試みる。著者によるこうした個人の分析は、ローマ社会における公的な存在である宗教と個々の Lived Religion を二項対立的に捉えるものではない。むしろ、Lived Religion の集積として宗教的機構を描き出すことを可能にするのである。

本書は前9世紀から後4世紀までのローマの原始社会からキリスト教が台頭するまでの期間、つまりはローマにおけるいわゆる伝統宗教が栄えていた全ての期間を対象としている。また、対象も幅広く、考古学的な史料から、伝統的な祭事神官団、皇帝崇拜、ミトラス教やキリスト教まで網羅的に扱われており、著者のローマ宗教に関する深い見識が発揮されている。

本書については、Richard Last や Sorin Nemeti による書評が存在する²⁾。両者は著者の幅

広い知識に敬意を払う一方で、Lived Ancient Religion の試みについては異なる評価を下している。Last はこのアプローチを肯定的に捉え、ローマ宗教の研究の新しい方法を切り開いたと評価している。一方で Nemeti は、本書は歴史学的なコンテキストを十分に踏まえていないと指摘し、社会学的な方法論に多分に依拠している点を批判している。

目次は以下の通りである。目次で提示していないが、各章はおおよそ3から6の節に分けられている。

1. A History of Mediterranean Religion
2. Revolutions in Religious Media in Iron Age Italy: The Ninth to Seventh Centuries BC
3. Religious Infrastructure: The Seventh to the Fifth Centuries BC
4. Religious Practices: The Sixth to Third Centuries BC
5. The Appropriation and Shaping of Religious Practices by Religious Actors: The Fifth to First Centuries BC
6. Speaking and Writing about Religion: The Third to First Centuries BC
7. The Redoubling of Religion in the Augustan Saddle Period: The First Century BC to the First Century AD
8. Lived Religion: The First to Second Centuries AD
9. New Gods: The First Century BC to the Second Century AD
10. Experts and Providers: The First to Third Centuries AD
11. Notional and Real Communities: The First to Third Centuries AD
12. Demarcations and Modes of Community: The Third to Fourth Centuries AD
13. Epilogue

第1章「地中海世界の宗教の歴史」では、本書の目的が、現代に生きる私達の理解を超えて世界がいかに変化していったかを考えることであると述べる。まずこうした変化を論じるため地理的前提に触れる。地中海世界は文化的に非統一的である一方で、相互の影響を強く受けているため概念上の統一は難しい。ローマの起源における周辺の影響や、ローマの拡大による思想、物、人の移動は無視できない存在である。そのため宗教は単一の存在であることはなく、複数形 religions で語られる。こうした複数形の宗教は、宗教的慣習、概念、機構の伝統として理解され、ある状況下では人々の職務として理解される。ここで、筆者は Émile Durkheim をとりあげる。彼の社会学的な意味では、宗教は社会的な産物、すなわち一定の領域の人々の集団によって構成され、その記号の体系は儀式の遂行によってその内在性が保たれ、イメージ、物語、文書、教義によって世界を説明しようとし、倫理的義務や確立された生き方、効果的な罰則機構により個人の行動を規定するものである。著者はこうした考えの有効性を認める一方でその限界も指摘する。筆者はそうした宗教の概念は、宗教の

複数性、つまりは互いに矛盾する概念や実践の永続的な併存を説明する上で限界があると述べる。そして宗教の社会的な側面と個人における重要性の変化を語るために、Lived Ancient Religion の視点が重要なのであると述べる。

次に、彼はこうしたアプローチのため、注目すべき対象として宗教の力の3つの側面、「宗教的エイジェンシー」、「宗教的アイデンティティ」、「宗教的コミュニケーション」を挙げる。まず宗教的エイジェンシーは問題解決の際に発揮される力のことで、儀式や祭事を通して神に人が働きかける力のことを指す。この力を神的存在に起因すると考えることで、宗教は人々が各々の状況を超え、行動に向けた創造的な戦略を考案することを可能にする。またこうした力は社会的な伝統や状況によって制限され、そして社会的構造や伝統を生み出す人々によって絶えず再生産され変化する一方で、そうした構造や伝統を変えることもある。

ここで挙げられるアイデンティティは集団に対する帰属意識としてのアイデンティティである。個人は単独で行動することは減多になく、しばしば自身を特定の集団の一員として行動する存在であると考えている。こうしたアイデンティティの重要な点は、社会が個々のメンバーをどの程度日常的な慣習や行動において規定しているかである。特に古代において、集団は確立された関係性をだけを指すのではなく、参加者（神や先祖の霊といった存在を含む）の状況によってその集団形成は変化しうる。家族や市民、出自といった多様なアイデンティティが挙げられ、人々はそうした多様な単位に同時に属している一方で、宗教的行為はそうした単位毎になされるからである。

最後に挙げられる宗教的なコミュニケーションは、神的存在とのコミュニケーションを指すだけでなく、祭儀や儀式の場における参加者とのコミュニケーションを示す。筆者はこうした行為の社会的な役割に目を向ける。儀式の中の象徴的行為は対象となる存在を超えて周囲の人々に対して語りかける。例えば軍の司令官が大きな声で誓いを立てたとき、それは神に届くだけでなく、司令官の宗教的な能力を彼の兵士に示すこととなる。また、こうした行為がその場で目や耳に届くことはなかったとしても、碑文や文書の形として残すことでその場にはいない人々に誇示することができる。

第2章「鉄器時代のイタリアにおける宗教的媒体の革命」は、荒屋に住むレアという名の空想上の女性の生活を描くことから始まる。筆者は原始社会における神的存在に対する意識の発生、つまりは宗教の発生について想像する。ここで想定される宗教的な信仰や思想についての考古学的証拠はほとんど残されていないが、そうした信仰や思想が存在しなかったわけではない。筆者はその探求を試みる。筆者がエピソードにおいて「本書は歴史を物語る」と述べているように、そこに実際に生きていた人々がいたという事実は本書の根底を形成している。以降の2～4章はイタリアを中心に鉄器時代を対象に考察が進められる。

本章では続いて個々の事例へと焦点を当てていく。儀式に使われた道具や動物の痕跡、葬礼について考察がなされ、そこで使われる道具や慣習からそこに参加する人々の意図を読み取っていく。例えば葬送儀礼の均質化は、個人の成功を他者が積極的に模倣していったこと

が原因であると筆者は考える。成功した方法を再現することは、失敗を犯すリスクを大きく減らすことが可能であるからである。次に宗教的行為の対象に目を向ける。儀式や祭事を通して神的存在へアプローチを行うためには、その対象は明確でなければならない。イメージや神に捧げられた土地、明確な表象やシンボル、文書や教義がなければ神的参加者の区別は難しく曖昧となる。しかし、音韻論や意味論に基づいた分析を通じて、神や女神の名前は青銅器時代には確立したことがわかっている。そのため当時の人々は、自身の目的の達成のため最も自身の欲求に則した対象を選ぶことができたと考えられる。筆者の考えでは、こうした文化的な機構が個人の宗教的な行動を規定し、宗教的なコミュニケーションに信頼性を与える。このような神々は現代の学者によって体系化されたような pantheon ではなく、人々の往来によって共有される知識である。こうした例として、彫刻や陶磁器に人や動物を描く文化や等身大の像の使用の流入をあげている。

第3章「宗教的インフラ」では神殿、祭壇、儀式（供犠・共食）といった宗教的な基盤を対象とし、神殿の建設や共食の用意、神への奉獻といった行為における、個人の戦略に焦点を当てる。神殿に使われる屋根のタイルの模様の流行に沿った導入や、重要な道沿いに建設された儀礼の地、前6世紀にさまざまな神や女神に対して建築された神殿を検証していく。こうした建造物はそれ自体として他者に対して自己の影響力を誇示する役割を果たす。特にこうした戦略の対象は身近な人々だけでなく、周辺の都市や旅人も対象となり、強く広くアピールできたと著者は考える。

第4章「宗教的实践」は、誓いや儀式といった行為や、カレンダー、物語といった多様な題材を扱い、個々人から国家に至るまでの古代世界の人々が宗教的な成功（神に祈りを聞き届けてもらう、禍を回避する等）を収めようとする努力に注目する。そうした試みから宗教的な機構が確立される様子が見出される。神的存在との関係を正しく築き上げるため、儀式の複雑化が進み、特別な規定が制定される。そして国家レベルでの特別な儀式は、儀式のただの参加者であった上流階級が主催者および支援者となり、特定の日付が与えられ、より特別な存在となることによって公的な宗教として成立する。

第5章および第6章では、中期から後期にかけての共和政ローマを中心に扱う。第5章「宗教的行為者による宗教的实践の流用と形成」では、ローマの宗教的な組織（神祇官、烏卜官、ウェスタの巫女等）、神殿の建築、競技、戦争に関わる儀式が検討される。個々の事例における個人の利用に目を向ける一方、そうした役職や出来事の宗教的コミュニケーションにおける仲介者としての役割も示される。また、共和政期に見られる多様な神々の存在について筆者は、市民宗教の pantheon が形成されたのではなく、家族、地域、知識人層の受容における個人の決定の集積であり、体系的な存在ではないと指摘する。この点で、過去の行動や以前の崇拜の対象は、繰返されることで強固となる一方で、改良され変化することで、創造的に、時に破壊的に流用される伝統として知覚される。第6章「宗教について語ること記すこと」では、神話や宗教がいかんにして語られるか、いかんにして表現されるかに焦点

を当てる。筆者は知識人層が残した文書から見出される彼らの宗教認識を扱うだけでなく、神話が語られることによる一般層への影響にも目を向ける。例えば、各都市で生み出される起源神話は歴史的事実として存在するだけでなく、神や女神と多くの異なる部族や土地を結びつけ、その都市の住民たちに自分たちの住む場所に価値を与える役割を果たす。さらに共通の祖先の存在は市民間の連帯を強めるだけでなく、都市間を結ぶ橋を作り上げる。

第7章「アウグストゥスの転換期における宗教の再興」では、アウグストゥスによる宗教改革について論じる。アウグストゥスによる宗教的コミュニケーションおよび宗教的役職の統制を利用した、人的ネットワークの拡大を明らかにする。また、アウグストゥス、つまりは皇帝の存在の登場によるコインや祭日、文書の表現への影響も紹介される。

第8章「Lived Religion」では、ローマ外での事例にも触れつつ、家庭内宗教 *religion privée* へと目を向ける。宗教的な場としての家庭、そして庭や墓地の利用、子供たちへの宗教の伝達、ラレースの祭儀といった例を検証していく。その上で筆者は、家庭内宗教は存在しないと述べ、家庭よりも大きな単位でそうした儀礼が行われることを指摘する。本書において宗教として扱われるコミュニケーションは、実践的な戦略・経験・概念のネットワークであり、体系化し共有される記号に基づく行為である。この点から宗教とは個人の中に存在するのではなく、様々な単位での社会の中に存在しうるのである。

第9章「新たな神々」は、新たな神々の受容の例として、イシスとセラピスおよび皇帝崇拜について議論を行う。ローマにおいて名声を勝ち得たイシスとセラピスが熱心な崇拜を受けていた様子が示される。皇帝崇拜については、生きた人間を神として受け入れる過程や皇帝崇拜の神官職の利用が述べられる。一方で、新奇なものや方法の受容に際して、全く問題が起こらないわけではない。ここでは、アラム語話者のユダヤ人によるギリシア・ローマの慣習の拒絶や、北西スペインの碑文において多くの新しい神々への言及が一過性のものだったことが例として挙げられている。

第10章「専門家と提供者」では、預言者や神秘家、占星術師そして公的な神官集団といった人々に加え、ミトラス教も対象として、宗教の知識の重要性について論じられる。東方、特にエジプトやバビロニア由来の知識や、専門家たちの持つ知識が庶民にとって日常を送る上で重要な役割を果たすようになる。筆者はこうした知識の重要性の増加の理由として、帝国の拡大による人の移動の増加、宗教的な好みの個別化、遠隔地への興味といったことを挙げている。いずれにせよ、ここでは知識の形式としての宗教が見出される。第11章「概念上の共同体と実際の共同体」は、共同体における文書の役割について、キリスト教やユダヤ教を中心に考察を行う。文書それ自体が実際の共同体を作り上げることはないが、概念上の共同体を作り上げることができる。また一方で現実存在する枠組みが、概念上の共同体を規定する役割も果たす。この点において筆者は、概念上と実際の共同体は同様の境界によって他の人々や共同体と区別されると主張する。

第12章「共同体の境界と様式」では宗教を利用した他者との線引きや共同体の形成につ

いて論じる。コンスタンティヌス帝の宗教活動やローマで個人により作られたカレンダーといった、キリスト教に関係する事例が中心的に扱われる。筆者は、宗教が儀式や倫理的欲求を用いて内外の境界を規定し、集団を作り上げる役目を果たすことを指摘する。こうした組織は、地位の保証やネットワークの構築などの恩恵を集団内部の人々に与える。

宗教が儀礼や祭事といった活動の形でなされていた状態から、知識や集団形成の役割を果たす存在へと変化していった。第13章「エピローグ」では、4世紀の後半においても歴史の過程で現れたこうした状況が続いていくことを示唆する。

以上が本書の紹介である。本書は *Lived Ancient Religion* の手法を使い、広範な時代を網羅的に扱っている。ローマの古代宗教を構成する要素の大半に触れているといっても過言ではないだろう。しかし、ローマの古代宗教を統合する単一的な見取り図を提供するわけではない。本書は全てに一貫する論を展開しているのではなく、膨大な数のケーススタディーによって構成されている。そのため筆者の描く宗教は、個々人の意思の働きによって成立しており、そのあり方や扱われ方は時代によって変わっていく。そのため従来のような伝統の中で受け継がれていく固定的な宗教ではなく、人の意思によって変わっていく流動的な宗教が本書において見出される。この点において本書は、宗教を社会構築主義的な視点から組み立てていると言える。

本書の特徴として、*Lived Religion* のアプローチ自体の考察、この概念の歴史や役割、さらにはそれに対する批評といった部分はあまり描かれていない。また本書で扱われる諸々の考察において、先行研究への批判は見られない。この点に関して言えば、本書は *Nemeti* の述べたように歴史学的視点を欠いていると言えるだろう。

これらを踏まえ、本書の評価を行なっていこうと思う。まず本書の目的は古代宗教において、*Lived Religion* の視点からそこに生きる人々を見出すことである。その点で言えば、第2章のレアという女性についての架空の物語は非常に示唆的である。現代宗教における *Lived Religion* 研究では、今そこに生きている人間に対して、心理学的なアプローチを通じて彼らの経験や実践を捉えることができる。一方で古代においてこの手法を持ち込むには、対象となる人々が存在しない。そのため、レアのような存在を作り上げた上で検証を行なっていく必要がある。こうした歴史的な想像力に基づいて捉えられる感情や動機の推定は、疑念が残る場合も多い。しかし、生きた人々を前提として据えているものの、筆者の考察自体は論理的で説得力がある。評者は、従来の研究手法では見出すことのできなかつた人々の存在を浮き彫りにしたという点で、本書における *Lived Ancient Religion* の試みは概ね成功したと見て良いと思う。特に、伝統の枠組みの中で宗教を公的な業務として捉えた時、こうした人々の意思を見出すことは難しいため、本書のアプローチは、今後の宗教研究において必要な視点の一つとなるだろう。

一方で、諸々の事例の考察から生み出される宗教の形成についてはまだまだ議論が必要であると感じた。第11章および第12章における議論は、キリスト教やユダヤ教の人々を中心

的な対象となる。筆者はこれらの対象を中心に考察し、そこから宗教上の変革を見出す。しかし、ローマの多神教における宗教の役割とキリスト教における宗教の役割はどの程度異なっているのかといったことや、対象とされるキリスト教の事例がどの程度ローマ宗教の文脈に沿って存在しているかについては言及されていない。そのため、通史的に宗教を考察してそこに変化を捉えるならば、少なくともその対象は統一されるか、変化の前と後の対象の共通点や影響を指摘する必要があるだろう。ローマの伝統宗教からキリスト教へと視点を移すなら、その間の連続性を考慮しない限り宗教の変化として捉えることは難しいように感じる。

本書は通史的に社会学的な観点からその時代を生きる人々を対象として宗教を論じ、*Lived Ancient Religion* という宗教研究における新しく重要な道筋を私たちに提供してくれる。*Lived Religion* 研究はまだ歴史の浅い研究であり、今も発展の最中である。今後の動向に注目したい。

註

- 1) David D. Hall (ed.), *Lived Religion in America: Toward a History of Practice*, Princeton University Press, 1997 において *Lived Religion* を明示的に初めて使用。*Lived Religion* の説明については下記より引用。David D. Hall, "Lived Religion", in: Charles H. Lippy and Peter W. Williams (eds.), *Encyclopedia of Religion in America*, CQ Press, 2010, 1282-1289.
- 2) Richard Last, "Review of: Jörg Rüpke, *Pantheon: A New History of Roman Religion*", *Museion: Journal of the Classical Association of Canada* 16-3 (2019), 535-539; Sorin Nemeti, "Review of: Jörg Rüpke, *Pantheon: A New History of Roman Religion*", *Classica et Christiana* 14 (2019), 343-347.